

第9回シンポジウムの開催報告(5月14日開催)

研究普及委員会 委員長 宮川裕之

2016年5月14日（土）に情報システム学会第9回シンポジウムが専修大学 神田キャンパスで開催されました。

IoTや人工知能といった情報技術の進展に伴い、人間と機械の労働分配や技術的特異点などに関心が寄せられています。情報システム学会では、人間活動となじみのとれた豊かな情報システム社会をめざすための議論を深めていくことが重要と考え、以下のようなシンポジウムを開催いたしました（参加者数51名）。いずれの講演内容についてもフロアーからの活発な質問や議論が展開されました。今後も会員の皆様のご期待に添えるようなシンポジウムを企画したいと考えております。

また、昨年度の10周年記念の一連のイベントの1つとして10周年記念論文賞の選考を行い、その結果、優秀論文賞2件が選出されました。今回のシンポジウムの中で、表彰式並びに受賞者講演を行いました。

- 優秀論文賞 「SCORオントロジーに基づく生産管理プロセスマデリング支援ツールの実装」
森田武史、洪潤基、斎藤忍、飯島正、山口高平
- 優秀論文賞 「バス歩行行列の仮想定のノード及びバスへの拡張」
中西昌武

講演1：矢島章夫氏（社会技術研究開発センター（JST RISTEX））からは「人と情報のエコシステム」と題して、人工知能、IoTやロボットなどの社会的影響について、国内外の研究成果や当センター独自のアンケート調査結果や社会的受容性に関する報告がありました。

講演2：八木晃二氏（野村総合研究所、本学会会員）からは「ビッグデータ・マイナンバー時代の情報システム社会」と題して、ビッグデータの社会を、サイバー空間上の多くの情報がマイナンバーを含めたID（Identifier）により連携されていくID社会として捉えた上で、サービス提供者中心の発想から利用者（国民）中心の制度設計の発想に転換することの重要性に触れられました。

講演3：山口高平氏（慶應義塾大学、前人工知能学会会長、本学会会員）からは「人工知能（AI）がもたらす新しい社会」と題して、この60年間のAI研究の歴史を振り返り、現在のAI研究を説明され、雇用、法律、倫理、政策、教育などの観点から人とAIの関わりについて言及されました。